

国立国語研究所学術情報リポジトリ

< 講演 > 放送と漢字

著者	柴田 実
図書名	日本語文字・表記の難しさとおもしろさ : 国立国語研究所第4回NINJALフォーラム
ページ	15-21
発行年	2012-06-29
シリーズ	NINJALフォーラムシリーズ ; 2
URL	http://doi.org/10.15084/00000900

講演2

放送と漢字

柴田 実（NHK放送文化研究所専門研究員）

演題は「放送と漢字」としたのですが、よく考えれば放送と言いましてもラジオがあります。ラジオの方は皆さんのところに漢字や文字が届くわけではないので、今日は昭和30年代以降のテレビのお話に限っておきましょう。あまり楽しくない話でも後ろの方に少し交えておこうかと考えています。

◆テレビで使う漢字・使えない漢字

テレビでは、使える文字と使えない文字があります。これはテレビの特性と非常に密接な関係があります。テレビは画面が少し横長です。一番初めの画面は横が4で縦が3だったのですが、今のデジタル放送では16対9と更に横長のものが増えてきました。もともとテレビを横書きにしたのは誰かはよく分かっていませんが、やはり横の方がスペースをとりやすいのでこれにしたのだらうと思っています。もちろん画面には制約があります。新聞も最近、活字が大きくなってきたために1行の文字数が減ってきました。テレビはもともと、どんなに大画面であつてもその比率は同じですので、初期の間は13文字ぐらいまで1列に並べましようということがお約束ごととしてありました。それが少し緩和されて、21文字ぐらいまでは何とか入るだらうというのがごく最近のところです。

テレビの特徴としては、映画と違って走査線を使っていますので、画面



しばた・みのる

NHK放送文化研究所専門研究員。1970年NHK入局当時はアナウンサーとしてテレビ・ラジオを担当。1996年からNHK放送文化研究所で、放送用語の調査・研究を担当。著書に『ふるさと日本のことば（1～6）』（監修、学習研究社、2005年）、『新版・NHKアナウンスセミナー』（共著、日本放送出版協会、2005年）ほか。

が粗いのです。昔、ドットプリンターがありました。あのドット数が少ないものと同じようなもので、難しい漢字、画数の多いものは画面でつぶれてしまうということがありました。そこで、なるべくつぶれずに分かるような字体で、文字フォント（デザイン）は丸ゴシックが中心に使われていました。ほかの出版物などでは明朝体が多いのですが、放送では明朝体をほとんど使わないのが特徴です。また、固有名詞がやたら多いのが画面の特徴です。例えば人の名前や地名、役職などです。

おまけに、画面は勝手に消えてしまうわけです。見ている人が「ちょっと待ってくれ」と言っても追いつきません。限られた時間だけ表示します。テレビが始まったときの経験則では、書いてある文字を口で2回唱えている間は消していけないとなっていたのです。例えば、画面の文字を声に出して2度「ガソリンの値上げ広がる、ガソリンの値上げ広がる」などと言ったら変えてもいいというルールが現場ではありました。

特に一番大きいのは、先ほど申し上げた画面は走査線で構成されているので、画数が多い漢字は非常に読みにくいという制約です。その中でテレビはスタートしました。

◆画面の文字の歴史

では、この文字はどうやって作っているかという点、意外や意外、テレビの初期はみんな手書きの文字でした。ですから、先ほど小駒さんがおつ

しゃつたような第1・第2の略字といわれているものが画面に出ていたこともあります。

それから、写真植字に変わりました。これは印画紙に文字を焼きつけて、それを特殊な機械で画面にはめ込んでいました。写真のサービスサイズほどの大きさの紙を使っていました。

私たちが日常見ている外国映画の原語版には日本語の字幕が付いています。無声映画時代にはこの字幕を使っていました。ただ、洋画の字幕にかなりのヒントを得たのではないかと考えています。ただし、洋画が大变普及して字幕がたくさん出てくるところと、一般の方々のいわゆる漢字力がだんだん落ちてくる時期が一致しているのは非常に不思議な気がしています。難しい漢字を使いこなせる方が非常に少なくなってきた時代に、私たちはこういう文字を画面で多く見るようになってきたわけです。

その後、1990年代以降になると、先ほどの写真植字といわれてい

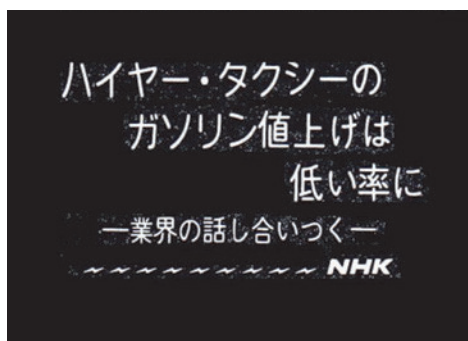


図1 昭和30年代のニュース(1)

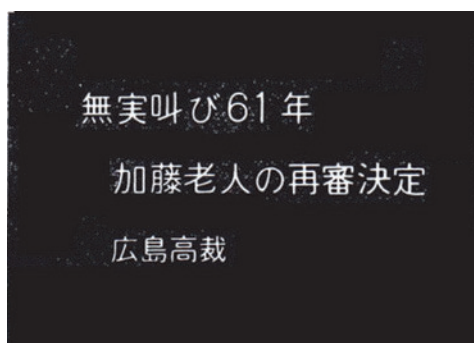


図2 昭和30年代のニュース(2)



図3 昭和30年代のニュース(3)

るものはほとんど使われなくなり、電子文字発生になります。つまり、書いてあるものが全く見えない、物として存在しない時代に入りました。これによって字に動きを付けたたり、色を付けたたり、いろいろなことが可能になってきました。

その後、今度は聴覚障害の方のために字幕放送をしました。これは一般的に出ている字幕とは別に、しゃべっている内容がすべて字幕になる放送です。テレビの電波のすき間がほんの少し空いているものですから、そこを利用してコードを乗せ込んで文字を発生させることになったわけです。

その変遷を見ますと、例えばNHKの昭和30年代のニュースでは、次のようなタイトルが出ていました。これは黒で出ていて、当時は白黒です。それから当然これも白黒ですが、カラーになってもしばらくこれが続いていて、後ろが黒からブルーに変わりました。ここで見ますと、その字数がいかに少ないかがお分かりだと思えます。「ハイヤー・タクシーのガソリン

値上げは低い率に―業界の話し合いつく―(図1)、これなどはかなり多い方です。例えば広島高裁で「加藤老人の再審決定 無実叫び61年」(図2)、この程度です。あるいは国際庭球連盟で「庭球をオリンピック種目に申請」(図3)、これはテニスという3文字を2文字にしたかったわけです。1文字たりともゆるがせにできない、なるべく減らそうということ。今では国際テニス連盟になっていますが、国際庭球連盟などという表示をしていました。

そのほかに、例えば非常に短い「奥さんに見送られて…」(図4)、これはご葬儀のところ。それから、石田ゆりさんで、「石田ゆり」(図5)とスーパーが入っているのですが、画面に対して文字の面積比がかなり大きいものでした。

その中で評判が悪かったのが「名曲アルバム」です。名曲を流して、後ろに曲に合った海外の風景を流しています。よく今DVDなどで売っていますが、あれの先駆けです。「このウェストミンスター寺院では彼の



図4 初期の画面の文字(1)



図5 初期の画面の文字(2)

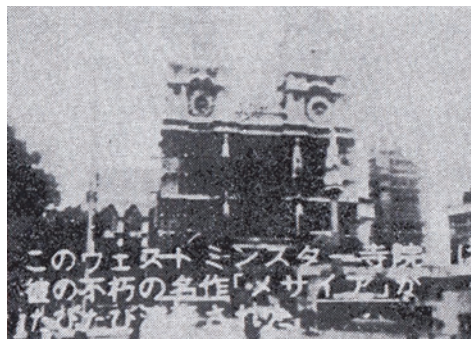


図6 「名曲アルバム」

朽の名作『メサイア』がたびたび演奏された」(図6)と3行にわたって入っています。これでも文字が多いと視聴者の皆さんから指摘されたわけです。

◆画面の文字は使い方が変わった

画面の文字はいろいろと時代によって変わってきました。初期のテレビは生放送が中心でした。ですから、ドラマをやっている、途中でセットが倒れる音が聞こえたり、役者が出番を間違えて死んだ人が生き返ったりするような場面が見られたわけですが、ビデオテープ、VTRが普及して、生放送から収録放送に変わりました。つまり、プリプロダクトからポストプロダクトへと変わったわけです。生放送のときには、準備をして誰が出るか字幕を用意して待っていて、その人が出たらその人の名前を画面に映し込みます。ところが収録の場合ですと、それは後でいくらでも時間をかけてできるので、しゃべった内容を全部字幕にすること

も可能になってきました。こういう制作状況の変化も非常に大きいです。

それから、色を付いたり、字をじわっと出したり、急にくるつと回転させたりという映像効果がありますので、それが今までにない、文字に活き活きとした動きを与えることが制作者側で分かりました。例えば高い声を出す人のしゃべった内容のスーパーは黄色い文字、おっとりとしやべる人は少し太めの文字にできるわけです。それが画面効果だったのです。

そのほかに、平等社会、共生社会というのでしょうか、障害を持った方にも楽しんでいただける、あるいは正しい情報を受け取っていただけるように配慮ができます。音声と映像がそれぞれに補い合うようになつてきました。例えば台所に立つて、お鍋が吹きこぼれそうになつているときにテレビを見ていても、それでも音は聞こえるということがあります。それから、子どもの寝つきが悪いので、音を消して見たいという要望があつたために、画面に文字を入れることが非常に増えてきました。それから、ザッピング視聴といって、チャンネルをたびたび変えます。そうすると、文字がないと一体何の番組がよく分からない、定着してくれないので、文字を画面の中に多用するようになりました。

もう一つ、受け取り手、受け手側、視聴者の皆さんの側の文化も変わってきました。私が大学生のころは、大学生が「少年マガジン」を読んでいると「何だ」と言われた時代です。今は電車の中で40〜50代のおじさんがコミック雑誌を読んでいます。学生はもちろん、若い奥さま、30代ぐらいの家庭婦人もコミックを読むようになりました。つまり、日本の文化の中で、いわゆる書物といわれているものの中でコミックの文化が与えている影響は非常に大きくなっています。絵が描いてあるだけではなくて、吹き出しにせりふが書いてあります。これがほとんど話し言葉で

す。書き言葉ではありません。これに慣れてきました。テレビは話し言葉が中心の放送です。ですから、話し言葉同士のつながりで、コミックの平面の紙文化から映像文化へ、そして映像文化から紙文化へとお互いの行き来が非常に増えてきて、相乗効果が表れてきたと判断しています。

そして何よりもテレビのチャンネル数が増え、放送時間が増え、情報量が非常に増えました。そのために、例えば昭和50年ぐらいまではテレビは完全に話し言葉の世界であつたものが、今度は逆に話し言葉だけではなくて、書き言葉がテレビの中に出てくるようになりました。これは一つには政治経済などの分野で書き言葉が日常的に使われているものが出てきたとも言えるわけですが、話し言葉だけではなくてきたのが現在の状況です。

では、ルールはどうなっているか。ルールは一応ありますが、各放送会社によつて若干違います。例えば新聞社ですと強制されたものと言うことができます。新聞社には校閲部がちゃんとあり、紙面を全部見て、先ほどの小駒さんのように校閲のベテランの方が「この表現はいいのか、この表記はいいのか」とおやりになりますが、テレビの場合はそういうわけにはいかないので、個々の現場の人間が、その現場で一番その番組にふさわしい表記を選ぶわけです。

先ほどの小駒さんの例では、「サトークンワネコガイスキダ」が3通り書いてあります。例えばこれは番組によつて違うのです。幼稚園児がしゃべっている場合には多分2番目か3番目を使うでしょう。大人、成人がしゃべるのだつたら一番上の表記を使うでしょう。このようなものが大まかにあります。そういう意味では、テレビの正書法はある面、大ざっぱにあるようなものですが、受け取り手側と制作者側の共通の土俵で一番いいものは何かを考えてきた歴史ではないかと考えています。

日本語には正書法がないといわれますが、デファクトスタンダードと

いうのでしょうか、世の中にどのくらい流通しているものかというのを一つの正書法と見なすやり方もあるうかと思えます。それにはたくさん
の文例を集めなければいけません。この文例を集めるのは非常に大変な仕事で、国立国語研究所も一生懸命やっています。1億語程度を集めるとおっしゃっていますが、私の計算では1億語ではまだ足りない、最低10億語ぐらいないと使いにくいだろうと思います。それには予算をたくさんかけなければいけないので、もともと国には国立国語研究所に資金を提供していただいて、立派なコーパスを早く作っていただくことが、みんなのための共通財産形成にはいいのではないかと考えています。

こちらはNHKのデータ放送です(図7)。リモコンのdボタンを押すとこれが出てきます。テレビ画面は実は右側だけなのですが、これに比べると膨大な分量の文字

数が画面に登場してきました。これがおまけにどんな切り替えができるので、普通のニュースですと、ほとんど文字情報として読み取ることができる状況になっています。

20年以上前に電話通信でISDNというサービスが始まったころ、「キャプテンシステム」というのがありましたが、文字を使った画面サービスでは、現在のほうが画面の精細度が上が

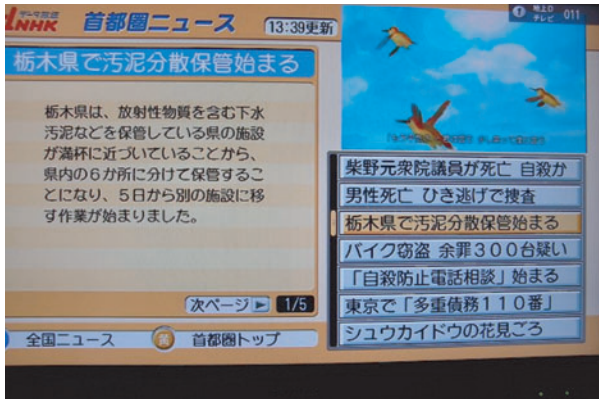


図7 データ放送

り、1画面に収めることが出来る文字数は飛躍的に増えてきました。

野球中継などスポーツ中継でも、選手のいろいろなデータをプレー中の画面に入れることは当たり前になりました。また、選手のプレーだけでなく、画面に映り込むことで広告効果を狙った企業ロゴや、宣伝の文句も私たちの家庭に届くようになりました。

その情報も、文字だけでなく、ロゴや画像、記号と、紙媒体ではあまりに不統一に見える取り合わせも日常化してきました。

文字も、静止しているものより動くものに目が行ってしまう人間の特性を利用して、「動く活字」が増えてきたのも、紙媒体から電子画面に変わったために出てきた特徴でしょう。

◆どのような文字が使われるか

テレビの画面ではどのような文字が使われるかというと、先ほどから言われているようにいろいろなものが使われていますが、一番多いのは10の数字です。それから、平仮名、片仮名が案外多いです。それから漢字になります。それも教育漢字といわれている義務教育の中で読めたり書けたりしなければいけないとされている文字がほとんどです。難しい漢字の頻度は非常に低いです。

テレビが欲しいがっているのは、数多くの難しい漢字、それこそ5万や10万、あるいは少なくとも3千という数字ではなさそうです。伝達効率がよい漢字、つまり画面でぱっと見せて、ぱっと分かる漢字を欲しいがっているわけです。これに、「×」「÷」などの記号も後で入ります。

◆常用漢字改定とマスコミの考え

常用漢字とマスコミの考え方です。常用漢字が一昨年改定されました。私たちは漢字と平仮名の交ぜ書きをなるべく回避したいというこ

とでしたが、新聞社の考え方も二通りあります。漢字が多くても正しい日本語を伝えるべきだという社と、易しい日本語で漢字が少ない文章にした方がいいという社があつて、少し意見が分かれています。常用漢字の答申の中の「基本的な考え方」では、コミュニケーションの手段としての漢字使用の観点極めて重要だと指摘をしつつ、放送にも、あるいは新聞にもこれを守ってほしいという態度が示されています。

その中で、NHKやほかのマスメディアは、例えば独自に使える表外字を放送で使っています。みんなが読めるからです。それから、あつても使わない漢字もあります。例えば「ふぞく」の「ふ」などはどちらを書いているかわからないので、「付」だけ使つて、「附」は使わないことにしています。

NHKが独自に使っている表外字

絆・疹・胚・炒(める)・肛・諜・挽・禄

新聞各社も使っている表外字

磯・哨・鵜・鶏(とり)・虹(コウ)・証(あかす)

常用漢字にあつても使わない漢字

虞・且・遵・但・朕・附・又

◆技術の進歩とテレビの文字

私たちは今まで紙や土に、あるいは岩や石などに文字を彫り付けていました。それが、テレビの手段の誕生によって電子画面を私たちは手にしました。人の手で書く制限がなくなりました。キーボードを打てば文字が書ける時代になったわけです。漢字を手書きして覚えるのと打って覚えるのはだいぶ違うので、今回の常用漢字の改定の中でも手書きの

重要性を非常に強く指摘していますが、このように時代が変わってきました。

それからもう一つ、漢字があればいいのかというと、読める漢字と使える漢字、あるいは書ける漢字の難度の違いがあります。例えば「鬱」などは読めても書けません。それから、町で見ると「皮膚科」の「膚」の字はほとんどが片仮名で表示されています。それから、醤油を売っているところでも「正油」と書いてある場合もあります。これが世の中の通常なのかと思います。特に今の時代、2010年以降、ハードウェアの機械に依存する文字のあり方が意識される時代に入ってきていると考えられます。

このハードウェアに適合する漢字などの表記の方法は、「漢字コード」と呼ばれる共通の約束事によってなり立っている点で、手書きの時代とは大きく違います。

漢字そのものだけではなく、漢字を取り巻くルールや約束事にも十分に気配りしなくては、自在に漢字を使う環境が整わなくなってきました。

◆画面の文字の将来

電子画面は消える存在であるということを、私たちは忘れてはいけません。消えて、流れます。読み手の意のままにならない存在です。「読書百遍意自ずから通ず」にはならない時代です。

今、こうやって画面に映していますが、この機械を私たちが作れと言われたら作れません。それから、インターネット上にたくさん情報がある日本語情報として載せてありますが、インターネットが万一目目になったとき、個人が復旧できるかといったら、そういうレベルの問題ではありません。あるいは電器屋さんがテレビを作ってくれるからいいですが、

あれを作れと言われても私たちには作れません。つまり、個人の手を離れたところに文字を載せ始めたのです。今までは、例えば石に彫るといったら、こつこつやって何年かすれば彫れましたが、今のハードウェアには私たちはすぐに追いつくわけにはいかないのです。そういう意味で、今後の日本語環境をこれから発展させていくには、社会的な基盤として非常に大きな仕組みが必要になります。

文字のソフトウェアの内容は非常に膨大な送り手によるわけですが、この膨大な送り手をどのように管理するか、みんながどのようにに合意するかが標準になるかと思います。これは各人の勝手でいいのかというと、例えば放送の場合はそうはいかないので、ある程度の大まかなルールを決めてやりましょうということになります。放送が勝手に決めたと見える約束事、それが社会のルールを形づくってきたのかもしれない。

これから私たちが漢字と付き合っていくのは、自分の趣味だけではなくて、読み手がどうなのかを意識する必要があります。例えば子どもの名前を付けるのに、人に読めないような名前を付けるのが独自性、アイデンティティーなのか、それとも社会で仲良く友達を増やしていくために易しく読めるような名前を付けるのか、というのが分かれ目になるかと思います。

それから、最近では映画なども3Dが出てきましたが、映像を考える場合に立体映像を抜かしていくことはできないと思います。つまり、漢字も立体漢字がひょっとしたら出てくる可能性があります。どなたかが立体漢字を作って、もつと効率のいい漢字の使い方ができるような世の中を作っていたらいいということです。話を終わりたいと思います。ありがとうございました。